

肺摘出ニ於ケル残肺ノ顕微鏡的検査ニ就キテ : Über die mikroskopische Befunde der zurückgebliebenen Lunge nach der Lungenexstirpation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38368

テハ近々中ニ公ニスル「クレンチソートノ瓦斯代謝ニ及ボス影響」ノ中ニ論述
 セン、唯々茲ニ余ハ本試験ノ特ニ巧妙ニ遂行セラレ得タルヲ喜ビ、又動物
 ハ特ニ無出血ト稱フベキ程之ト亦巧妙ニ手術セラレタル者ナルヲ特記ス。
 而シテ本試験ハ殊ニ肺抽出ノ結果ヲ知ランガ爲メニ行ハル者ニシテ彼ノ
 ルリン氏ガ試ミタル業蹟ニ比スレバ或ハ詳細ニ渡リ、一目了然其關係ノ全
 體ヲ知ルニ難カラズ。又茲ニ得タル成績ハ肺ノ代償的事實ヲ教示スル者ニ
 シテ左肺上葉ノ抽出ハ少ナクモ約全兩肺ノ三分ノ一重量ヲ占ムル者ナルガ
 故ニ大量ノ炭酸ヲ減セザルニカカラザルガ如ク思ハル、モ事實ハ反ニ之モ瓦
 斯代謝ノ減少ヲ來サズ。

結 論

- 上叙ノ事實ヲ概括スルニ
- 一、動物ノ肺大部ノ抽出ニ堪ホ。
- 二、肺ノ大部ヲ抽出スルモ瓦斯代謝ニ著シキ變狀ナキモ稍々増進セシムル傾向アリ。
- 三、肺抽出直後ニ呼吸數ヲ増シ、一定日ノ後舊ニ復シ更ニ反テ減少スルが如シ。
- 五、呼吸商ニ異常ナシ。

(明治四十三年五月十九日)

文 献 目 録

1. Rauber, angeführt von Konrad Moeller. Zeitschrift für Biologie V. 14, 1878.
2. A. Wiel und R. Thoma, Virchow's Archiv V. 75, 1879.
3. Grehannt und Guinpard: citiert in „dem resp. Gaswechsel“ (A. Jaquet) in Ergebnisse der Physiol. 1903.
4. Harley, 'The effect of compression on one lung on respiratory gas-exchange. Journal of Physiology. V. 25 1899—1900.

5. K. Moeller, Mohnensture-Ausscheidung des Menschen bei verkleinerter Lungenoberfläche. Zeitschr. f. Biol. 1878.
6. Speck und Gelpert, citiert in Ergebnisse der Physiologie. 1903.
7. A. Loewy, der Resp. u. der Gesamtumsatz. Handbuch der Biochemie. 1903.
8. Dionys Hellin, Die Folge von Lungenexstirpation. Arch. f. exp. Path. u. Pharm. 1906.
9. R. Tiegertstadt, Über den Kreislauf nach Bindung der linken Lungenarterie. Skand. Arch. f. Physiol. V. 19. 1907.
10. Holger Moellgard, Teber Emphysem u. Hypertrophie nach Exstirpation der einen Lunge. Skand. Arch. f. Physiol. 1909.
11. Estlander, citiert in demselben.
12. Haldane, A new form of apparatus for measuring the respiratory exchange of animals. Journal of physiol. 13.
13. Gesehnet von „W. Krause, Die Anatomie des Kaninchens.“

● 肺抽出ニ於ケル殘肺ノ顯微鏡的検査ニ就キテ

Über die mikroskopische Befunde der zurückgebliebenen Lunge nach der Lungenexstirpation.

東京大學生醫學教室ニ於テ

ニクトル 竹中繁次郎

余ハ本誌ニ於テ「肺抽出後ノ瓦斯代謝ニ付キテ」ノ所見ヲ公ニシ、他日動物ヲ屠リ更ニ所見ヲ追究セント企テシガ、偶々避ケ難キ事故アリテ後事

ナ同教室ノ熊谷博士ニ依頼シ歸郷ノ途ニ就キシニ不幸ニシテ死セシト云フ、氏ノ談ル所ニヨレバ死前二三日來健カナリケル本動物ハ腰ヲ拔カシ六月二十一日斃ルト之レ實ニ術後約六週半ニシテ氏ハ腹部動脈等ニ血塞ノ如キ者ノ生ツタルニ非ラズヤト考ヘ、血管ヲ開キシモ何等ノ變化ヲ發見セザリシト云フ或ハ使丁ガ動物小舎ノ戸ヲ閉サントシテ腰部ヲ打テタルニ非ラズヤト云ヘリ、或ハ然ラン、而シテ本篇ハ前文ノ附録トモ見做スベキ者ニシテ余ト同一ノ業蹟ヲ企テントスル同學ノ士ノ爲メニ記スル者ナリ。

肺ノ増殖 Hyperplasia、ハアリ得ベキ者ニ非ラズトハ從來廣ク信セラレタル事實ナレドモ、フツセ氏 Busse (1) 一度ヒ人肺ニ付キノ増殖ノ疑ヲ挾ミシヨリ、續キテヘルリン氏 Helmh (2) ガ家兎ノ右肺ヲ摘出シテ之ヲ論究セリ、曰ク「顯微鏡的所見ハ約五週ノ後初メテ著シキ變化ヲ現ハス其ノ主ナル變化ハ肺血管アリテ肺胞間ノ血管ハ擴大セラレ、殊ニ比較的大ナル血管ニ於テ筋層甚シク肥厚シ屢々其厚サ正常體ノ二倍ニ至ルアリ……(中略)……」血管ノ此肥大ハ已ニ一肺ヲ以テ年餘生活セシ家兎ニ於テハ僅微ナリ、之レ殘存セル肺ノ容積増加ト同時ニ血管ノ新生ヲ來シ、ヨリテ血量ノ擴布狀態、正常體ニ接近スレバナリ、結締織ノ増殖、殘存セル肺中ニ證明スルヲ得ズ」ト、氏ハ更ニ言ヲ進メテ「肺ノ膨大 Vargrossenung、ハ肥大 Hypertrophia、増殖 Hyperdastie ニヨルカ或ハ氣腫性變化ニヨリテ發顯スルヤ之等ノ問題ハ未ダ全ク明カナラズ、余ハフツセ氏及ウチルフ氏 Wolffト同シク顯微鏡的標本ニ基キ、キニウスキー氏 Kiewitzノ想像スル如ク明カニ肥大恐ラク増殖ニシテ氣腫ニアラザル觀念ヲ得タリ、肺胞ハ殊ニ膨大スレドモ氣腫ニ見ルカ如キ度合ニ非ラズシテ氣腫ト異ナリ肺胞腔壁ノ消失並ニ數個ノ肺胞ノ融合ニ由リテ來ルモノニ非ラズ、尙ホ又タ肉眼上氣腫ニ於ケル如ク肺胞ノ膨大ヲ認識セズト云ヘリ。

其後ハ西曆一九〇九年ハミヨルガルド氏 Moellgard (3) ハ左肺摘出ノ研究

ヲ公ニシテ次ノ如ク述ベリ「手術セル動物ハ種類及年齡並ニ術後生活セル時日ニ從ヒ二種ニ區別ス、第一種ハ分娩後六日ニシテ手術セラレ術後二乃至三半月生存セル、大ヲ包括シ、第二種ハ何レモ成長セル動物ニシテ凡テ術後死ニ至ルマデ僅カ十四日生活セシ猫ナリ。手術セル猫ノ數ハ五頭ヲ算ス、動物ヲ(對照動物モ共ニ)出血ニヨリテ斃シ、兩肋膜腔ヲ開キ「フオルモル」(二十%)ヲ用ヒテ胸廓ヲ固定シ、二日ニシテ初メテ表(略)ノ圖ニ見ル如キ標本ヲ製セリ。今第一類ニ付キテ論スレバ三大共ニ心臓全部ノ肥大殊ニ右室ノ肥大ヲ認ム、……(中略)……肺ニ付キテハ右肺ノ著シキ膨大ヲ發見シ、……(中略)……鏡檢上唯々僅微ナル肺胞ノ擴大ヲ示スカ或ハ毫モ擴大ヲ認マザリキ、故ニ此膨大ハ氣腫ニ算入スベカラザル者ニシテ肺原體 Integumente ノ過度ノ増殖即形成ヲ意味ス、……(略)第二類即チ術後十四日ニシテ殺セル動物ハ心臓ノ肥大ヲ示サザル特徴アリ、右肺ハ反ノ常ニ多少膨大シ通例著明ナルヲ常トス、即チ右肺氣腫ヲ形成ス、而シテ膨大ノ度ハ心臓ノ力ト作業トニ關ハルヲ明ナリ、又曰ク「試驗動物ノ第一類ヲ第二類ニ比較セバ容易ニ特徴ハ第一類ニ對シ「氣腫ヲ供ハザル心臓肥大」第二類ニハ對シ「心臓肥大ヲ供ハザル氣腫」ト云フヲ得シト、而シテ其由ツテ來ル所以ニ就テハ「一肺ヲ摘出シ突然右心ニ動作ヲ獎勵シ全血量ヲ他肺ニ注グニ至ルヤ無障害ノ肺ハ膨大セラレ肺胞ハ其腔壁ヲ萎縮セシムル」トナクシテ擴大ス換言スレバ殘氣ハ増加シ動物ハ多量ニ充實セル肺ヲ以テ呼吸ス毛細管ハ是ニ於テ擴大シ心臓ハ負擔ヲ減ズ若シ心臓ニ變化ヲ呈セザル時ハ肺ノ擴大ヲ殘シ慢性代償性ノ氣腫ヲ形成ス此ノ氣腫形成ニハ時日及年齡モ關係ヲ有スル者ト思ハル、而シテ心臓ノ力強大ナレバ肺ノ膨大ノ益々少キヲ常トス、若シ又心ガ初ヨリ微弱ナリトセバ氣腫ハ高度ニ増劇スル者ナリ」ト云ヘリ、氏ハ此成績ヲ約シテ「小循環ノ一部ヲ廢用セシムルトキハ殘余ノ肺ハ自ら擴張シ、心臓モ亦肥大ス、此擴張ハ肥大ニ由リテ力ヲ盛ニシタル心臓カ肺ノ擴張ナキモ其機能ヲ實行シ得ルニ至ル迄持續ス、

(原著及實驗)

(原著及實驗)

ト云ハリ。

蓋シ此説明ハポール氏 Bohr (4) (5) ノ肺氣腫發生説ヲ其僱用ヒタル者ニシテ氏ハ氣腫ヲ以テ一定ノ反射ニヨツテ誘起セラレタル代償的現象ト考ヘ、心膈力ノ負擔ヲ減ズルニ必要トスル血管ノ擴張ヲ來サンガ爲メニ適當ナル度ニ胸廓ヲ擴大セシムルニ至ラシムル者トセリ。即チ氏ガ會テツチ井ルツル氏 Zener (6) 「ライヌクツシヨ」ニ對シ答ヘタル中ニ左ノ廓アリ、

„Nach meiner Anschauung ist die nach Anstrengung entstehende Lungenblähung, wie auch das nach primären Leiden des Lungengewebes (chronische Bronchitis) sich entwickelnde Lungenemphysem als ein Anpassungsreflex zu betrachten, dazu geeignet, die expiratorische und zirculatorische Verhältnisse der Lungen zu erleichtern.“

„Ich fasse also in der Mehrzahl der Fälle die krankhafte Lungen-erweiterung als ein zweckmässigen, kompensatorischen Reflex auf analog denjenigen Aenderungen der Residual- und Mittel-Capazität, welche unter normalen Verhältnissen nach Anstrengung eintreten.“

以テポール氏肺氣腫發生説ノ全汎ヲ觀察スルニ足ルヘシ、以上ノ事實ヲ總括スルニ、肺氣腫ナル者ハ適合反射 Anpassungsreflex ノ結果ニミテ其消否如何ハ一ニ肺毛細管ノ充實ニ關ス、肺毛細管ノ充實ハ總テ肺ノ増殖ヲ起ス者ニシテ殊ニ動物ノ種族及年齢ニ關係アル者ノ如シ、茲ニ注意ヲ要スルハポール氏ノ肺氣腫發生落ハ從來記載セラレタル(7)諸種ノ臆説ニ反シテ肺活量ノ測定ニ基キ生理學的基礎ノ上ニ立テル斬新ノ説明ナル事ナリトス。尙ホ一言ス余ハ上述ノ關係ヲ知ランガ爲メニ時ニ本試驗ヲ遂行シタル者ニ非ラズ、管肺抽出後ノ瓦斯代謝ヲ知ラント欲シタル者ナレドモ偶々上述ノ事實ヲ讀ミ、自ラ興味ヲ覺エシト同時ニ幸ニ同一例ノ本材料ヲ得タルヲ以テ茲ニ論ゼシノミ、而シテ本動物ハ前編ニ報告シタル左肺上葉ヲ抽出シ瓦

斯代謝ヲ検査セシ牝家兔ニシテ明治四十三年五月八日午後五時ニ手術シ今年六月二十一日ニ死亡シ其間四十五日ノ生活ヲ保チシ者ナリ今先ヅ抽出セル肺ヲ殘遺セル肺トヲ比較セントス。

* * * * *

今動物ノ肺ノ組織的記載ヲナスニ當リ先ヅ該肺ノ肉眼的變化ヲ記セントス、彼ノ先ニ抽出シテ「アルコホル」中ニ保存セル所謂左肺上葉ハ稍々滑軟ノ觀アリテ緻密ナリ色ハ赤褐色ニ近シ反之手術ニヨリ抽出セザル右肺所謂無障害肺ハ前者ニ比シ一日異様ノ觀アリテ稍々膨大シ殊ニ第三葉尤モ著シ其色ハ寧ロ蒼白ニ近クシテ鈍灰黄色ヲ呈シ、質粗ニシテ所々殊ニ外縁ニ擴大セル無數ノ小泡ヲ認ム、之ニヨツテ是ヲ見レバ本標本ハ肺抽出後他肺ニ氣腫ヲ誘起セルコトヲ示ス。

次ニ顯微鏡的検査ヲ遂グルニ當リ方式ノ如ク「アルコホル」ニテ固定セル兩種ノ肺ヲ「エロイミン」ニ浸漬シ、薄片ヲ作り、ハンゼン氏「ハイトキシン」ニ染メ、一%「エチンアルコール」液中ニ後染色ヲ行ヒ兩種相比較シテ鏡檢セリ、此薄片ハ肉眼ニテ透見スレバ已ニ著大ナル變化ヲ示シ、殘留代償セル肺切片ハ手術ニヨリテ抽出セル肺切片ニ比シ明カニ氣腫ヲ起セル者ナルヲ確メシム。

斯ク調査セル右肺ノ薄片ハ顯微鏡下ニ於テ一般ニ肺胞ノ擴大ヲ認メ、概シテ隔壁ハ非薄ナリ而シテ此肺胞ヲ大小ニヨリテ區別スレバ三種ニ分ツヲ得、大肺胞ハ通例ノ質性肺氣腫ニ際シテ見ルト同シク不正形ニシテ肺胞腔内ニ突出スル銳利ナル突起アリ、恰モ二個若クハ數個ノ肺胞ガ互ニ相合一セルガ如キ觀ヲ與フ、事實是等ノ肺胞ハ凡テ非薄ナル隔壁ヨリナリ、場所ニヨリテハ此非薄ナル隔壁ハ進ンテ破滅セントスル形跡ヲ呈ハス、又中等大ノ肺胞モ肺胞ノ擴大セル者ニ外ナラズシテ隔壁ハ稍々非薄、場所ニヨリ之亦將ニ消滅セントスルノ狀ヲ示ス、第三ノ小肺胞ハ往々大肺胞ノ周圍ニ

存スル者ニシテ其隔壁内ニ潛在セル如キ觀アリ、之レ恐ラク壓退セラレタ
ル (Arterfasci) 肺胞ニ一致スル者ナランモ余リ多カラズ、其隔壁ハ他
ニ比シテ厚シ、而シテ三種肺胞ノ隔壁ハ正常肺ト同シク結締織重其細胞、
内皮細胞等ヨリ成リ、毛細管ハ特大ナリト認ムルヲ得ズ。

標準標本ト認ムベキ手術ニヨリ抽出セル左肺ノ切片ハ上述ノ標本ト全ク異
ナリ肺胞ハ大概同一ニシテ、隔壁モ菲薄ナラス。

更ニ肺組織ノ彈力纖維ヲワイゲルト氏 Weigert ノ方法ニ據リ檢スレバ兩
種共ニ略同一狀ヲ呈スル者ニシテ抽出セル左肺上葉ノ彈力纖維ハ遺殘右肺
ノ夫レニ比シ別ニ多寡ヲ論スルノ價值ラズ換言スレバ遺殘右肺ノ彈力纖維
ノ存在狀態肺胞ノ増殖ヲ想像セシムルニ足ルベキ過剩ヲ示サズ。

* * * * *

次上ノ所見ニ付キテ考フレバ遺殘セル肺部ハ左肺大部ノ抽出ニヨリ肺氣腫
ヲ起セルト被フベカラザル者ニシテ、尙ホ當大學病理學教室長與助教授ニ
此標本ヲ示セシニ「人體ニ見ルガ如キ肺氣腫ナルト疑フベキニ非ラズ」ト
セリ。故ニ本試驗ハヘルリン氏ノ者ト類似スルニ拘ハラズ肺胞増殖ノ微ナ
ク肺毛細管モ擴大セズ純乎タル肺氣腫ヲ示ス者ナリ。蓋シ予ガ肺胞ノ増殖
ヲ否認スルハ右肺標本ノ所謂小肺胞ノ狀態ガ彼ノ標準標本タル抽出左肺ニ
比シ毫モ異ナル所ナキ肺彈力纖維ノ分布トニ基ケリ、然シ尙ホ長時ノ生活
ニヨリ或ハ斯ル増殖現象ノ起ルコトナキヲ保シ難シ、尙ホ本例ハメルガルト
氏ノ種族及年齡ニ關スル發生說ヲ批難スル者ニシテ氏ハ幼若ノ家兔ヲ大ト
同シク『肺氣腫ヲ供ハサル心臓肥大』ノ部屬ニ屬セシムルト雖ドモ予ノ試
驗動物ハ幼若ノ家兔ナルニモ關ラズ肺抽出後ニ肺氣腫ヲ起スニ足ルヲ證セ
リ。

終リニ臨ミ、一言スベキハポール氏ノ肺氣腫發生說ノ價值ニシテ本標本
ハ氏ノ臆說ヲ確マルニ足ル者ナリト信ス、抑モ肺氣腫ノ發生ニ關スル古來

(原著及實驗)

ノ諸說ハ頗ル多ク、茲ニ說明ヲ省略スト雖ドモソコロースキー氏ニ敵ヒ之
レヲ概約スレハ肺彈力纖維ノ薄弱ニ歸スルカ或ハ吸氣說呼吸說ノ如キ器械
的作用ニ歸ス、然シ本例ニ於テハ肺彈力ノ減退ヲ想像スヘカラズ又呼吸氣
クハ吸氣ノ障害ヲモ主張スベカラズ而シテポール氏ガ想像セル如ク、肺氣
腫ハ代償的反射ノ意味ヲ以テ起ルト見做シテ說明スルヲ尤モ適當トス。今
之ヲ俱體的ニ考慮スレハ初メ本動物ノ肺部ヲ抽出スル呼吸面ハ狹隘セラル
ト雖別ニ身體内ノ酸化作用ニ變化ヲ呈セズ、炭酸ノ形成ヲ正常ニ營ムガ
故ニ其排泄ヲ血行ニ求ムルハ勿論、予ノ證明セル如ク呼吸數モ増加シテ、
代償スル者ナリ、其二三月ノ後呼吸ノ正常ニ復セルハ恐ラク肺氣腫ヲ全
クシメタル徵ニシテ蓋シ反射ニヨリ、代償ノ意味ヲ表示セル者ナラン。

* * * * *

以上ノ事柄ヲ總括スレハ左ノ結論ヲ得。

- 一、幼齡ノ家兔ニ就テ肺ノ一部ヲ抽出スレハ肺氣腫ヲ喚起ス。
- 二、肺氣腫ノ成立ニ關スルポール氏ノ說ヲ保護ス。
- 三、本標本ニハヘルリン氏ガ云ヘル如キ肺胞増殖ノ特徵ヲ認メス。

文獻目錄

1. Busse, über Atrophie und Hypertrophie der Lunge. Vortrag im medicin. Verein zu Greifswald I. II. 1902. Deutsche medizinische Wochenschrift 1902. No. 10.
2. D. Hellm, Die Folge von Lungensextraktion. Archiv f. exp. Path. u. Pharm. V. 55. 1903.
3. Holger Moellgard, Ueber Emphysem und Herzhypertrophie nach Exstirpation der einen Lunge. Skand. Archiv f. Physiol. XXII 1909.

(漫録)

4. Christian Bohr, Die funktionelle Bedeutung des Lungenvolums in normalen und pathologischen Zuständen. Wiener med. W. 1907 No. 46.
 5. Christian Bohr, Zur Theorie der Entstehung des Lungempemphysem. Centralblatt für die gesamte Physiologie u. Pathologie des Stoffwechsels, 1908.
 6. G. Zeulzer, Ueber Yagusneurose. Centralblatt f. die gesamte Physiol. u. Patholog. d. Stoffwechsels, 1908.
 7. Alfred v. Sokolowski, Klinik der Brustkrankheiten, 1906. A. F.inkel, Die Respirationkrankheiten, 1903.
- 竹中氏論文附圖三ノ印刷ノ都合ニヨリテ省略セリ

* * * * *

.....

漫 録

● 故小原芳雄君遺稿

八 田 智 証

余は前號に於て故小原君の爲人ニ事蹟に就てわが知れる處を略記せしが萬一の誤謬を慮り一應岡本京太郎氏の校閲を経たのである、たゞ心元なきはわが筆の拙さ十分にその意を盡すを得ず宵の嵐にいさゞ咲き榮へのふかつたことである

こゝに掲ぐる有賀學士の容態、高、中村兩君の感懐並に中島君宛の遺翰等は、私一個人の望としては是非一纏めとして前號誌上に載せ時に小原芳雄君追悼號にても題し度くひそかに思ふて居たのであるが、何分にも頁數の許さざるものあると一はゞ切期日後に到着せしもの多かりし爲め餘儀なくも本號に之か掲載方を願ふことゝなつたのである、然し余は小原君其人の爲に斯くも多大の割愛を快く承諾せられたる松原博士の好情を感謝すると共に、余が問ふ處余が願ふ處に對し御多忙をも顧みずそれ〱玉稿を賜はつた各位に向て深甚なる謝意を表するものである、殊に平素親交深かりし中島君宛の書柬は普通の知己友人に發したるものと異り同級同國と云ふ特別な誼より屢往酬せられたるもので、其の少しも隠す處なく且つ何等の飾りなき處は實に故人の眞骨頭を知り眞面目を窺ふにこゝろなき好資料と信するのである (八田註、以下全じ)

* * * * *

拜啓 未だ面識を得ず候故小原芳雄君病狀に關し全君令兄より貴下まで何か診察時の模様御報致すべく通知に接せしは今より約十日斗前にて候へしが小生も開業の身さて多忙に取紛れつい放擲罷在候處ふも本月十五日メ切この事胸に浮び候まゝ茲に取急き一筆申上候間何分よろしく御容捨可被下候尤も私も學術的の考を以て診察致したるにては無之單に臨床的の診察に止まることに候へば胸部の變化等ほもさより大体に過ぎず候間右舍み被下度候

明治四十三年十二月廿三日突然電報來れり開き見れば「芳雄ヤマイ來診タノム眞一郎」とあり小生は奇怪の念に打たれ小原君は在京醫科大學に無事研究せらるゝ筈ふるに又意外の通知を故郷より得たるものかふと一先きに御地醫專校を退きし際は健康勝れずと聞きしが其後快復せし由聞きしに今突如此報に接し且つ驚き且つ疑ひ愴惶氏か郷里ふる上伊那郡中箕輪村に驅